

2024年コンサートまで

52日

練習はあと**8回**

DMC団員の皆さま

昨年、出石前幹事長がほぼ毎週瓦版を作成され、さまざまな情報の共有が図られていました。

今年、団員の皆さんと委員会メンバーの意見交換の機会のなかで、「団員の皆さんと情報を共有するのはとっても大事」という意見を受け、遅ればせながら皆さんに「委員会通信」という形で共有したい情報などを出すように努力して参ります。

昨年のようにほぼ毎週とは行かないと思いますが、よろしく願います。(文責池田)

【定演の曲紹介】

これから何回かに分けて定演の曲紹介をします。

(定演パンフ原稿より転載)

まずは第1ステージ **BACH モテット1番BWV25**

バッハと言えば、子供の頃、学校の音楽室に並んでいたクラシック作曲家の肖像画の中でクルクルの白い長髪にいかめしい顔をしたおじさまを思い出す方もいらっしゃるかもしれません。(あの肖像画、初めは楽器を買ったときのおまけのカレンダーに印刷されていたものというお話も)ドイツ生まれのバロック音楽の作曲家、オルガニストとして有名なバッハは、1750年に65歳で亡くなるまでに非常に多くの器楽曲、合唱曲を発表しました。

モテットというのは中世からルネサンス期にかけて成立・発展した声楽曲のジャンルのことで、本来は聖書からの引用やコラールをテキストに作られ、結婚式、葬儀、祝典等の礼拝で演奏されました。

モテットBWV225は礼拝の目的が何だったかは不明ですが、3部構成、2重合唱(SATBの4声が2組)、演奏時間は約15分とバッハのモテットの中では最も規模の大きいもので、しかもテキストはお約束の聖句・コラールに加え、中間部には自由詩が例外的に組み入れられています。モーツァルトがライプツィヒを訪れた際にこの曲の演奏を聴いて、非常に驚き、かつ感銘を受けたとも伝えられています。

バッハ自身、自分の作品は当時の他の作曲家と比べてはるかに難しく複雑だと認めています。モテットBWV225も緻密で複雑で練習すればするほど課題が見えてくる難曲です。

それでも、中村先生のご指導を得て満十年、私たちはこの明るく華やかで、軽快で壮麗かつ果てしなく難しい曲に挑もうと決心し、取り組んできました。

本日は、中村先生の指揮と、常に私たちに寄り添い続けてくださっている相澤先生のオルガンに支え導いていただきながら歌います。

せっかくライブでお聴きいただきますので、ポイント(笑いどころ?)をちょっぴりご紹介させていただきます。

第1部(詩篇149,1-3)

「主に向かいて新しき歌をうたえ」と主を賛美します。前半はSinget「歌え」という歓声から始まり、2組の合唱がお互いに呼応しながら曲を進めます。後半では8つの声部が順にテーマを担当しながらポリフォニーを展開、声をどんどん重ねつつ、頂点を目指し盛り上がっていきます。

後半は各パートが交代で歌うテーマがくっきり浮彫になるよう他パートが協力できるかがカギです。

第2部(コラールとアリア)

和声的なホモフォニーで第2合唱(コラール)が人の世の儚さを歌うのを受けて、第1合唱(アリア:自由詩)は「神の手にすべてをゆだねるものは幸いである」と悩みや嘆きを包むように歌いかけます。

次々と世の無常を語り進めるドイツ語の微妙な発音に苦戦しながらも2つの合唱の対比やかけ合いを上手く表現したいところです。

第3部(詩篇150,2,6)

Lobet den Herrn「主をほめたたえよ」から始まる8声の壮麗なフーガから始まります。後半は4声に集約され、ベースから順にソプラノへとテーマをなぞっていき軽快さを失わずにかつ、次第に力強く高まりハレルヤ!と歓喜に満ち、曲を締めくくります。

私たちも歓喜に満ちて歌いあげられたら幸いです。

【委員会からの連絡】

定演チケットの追加の取扱

何人かの団員から問い合わせを受け、8月17日の委員会で以下のように整理しました。

1 定演チケットが余りそうな場合は、団員間での話し合いで調整ください。

※金額は団員間でお話ください。

※定演チケットの来場見込みについては、8/31、9/21にフォームスによるアンケートを行う予定です。丁背に当たって団員

2 団員間調整が難しくチケットが入手できない場合、団で保有しています予備

のチケットをお譲りします。

※チケットは1枚1,500円で配布いたします。

必要な枚数を池田もしくはお近くの委員までお声がけください。

以上

---- 最後までお読みいただきありがとうございます。

定演の成功に向けて頑張ってください！ -----

※この情報はDMCホームページの団内掲示板にも掲載します。